

「なんで笑うの？」その一言がぼくを変えた

広野町立広野中学校 3年 松本 理央

「なんで笑うの？」

そう言われたのは、小学六年生のときでした。クラスの発表会で、ある友だちが話しているとき、ぼくは小さく笑ってしまいました。本人に聞こえるほどではなかったと思ったのに、その子はすぐにぼくを見て、真剣な顔でそう言いました。

そのときは、正直、なんでそんなことで怒るんだろうと思いました。でも、帰り道で、ふとその子の顔が思い浮かび、なんだか胸が苦しくなりました。ぼくの何気ない行動で、誰かを傷つけてしまった。笑った理由も、自分でもよくわからなかったからです。

それから、ぼくは「人を傷つける笑い」について考えるようになりました。テレビでも、SNSでも、友だちとの会話の中でも、笑いにはあふれています。でも、その笑いが、誰かの痛みの上に成り立っていることもあることに気づきました。

ある日、学校の道徳の授業で「いじめを見て笑うのは、加害者と同じだと思いますか？」という問いが出ました。ぼくはドキッとしました。まさに昔の自分のことだったからです。

人をバカにする笑い、見た目やしゃべり方をからかう笑い、間違えたことを笑う声……。それらを「ただの冗談」と思っていた自分が、どれだけ無神経だったかを考えると、恥ずかしくなります。

人にはそれぞれ、育った環境も、考え方も、感じ方も違いがあります。それを知らずに、自分の「普通」を押しつけたり、面白がったりするのは、差別や偏見につながる第一歩だと思いました。

中学に入り、ある友だちが発達障がいを持っていることを知りました。最初は戸惑いもありましたが、その子のペースに合わせて話すうちに、たくさんのことを学びました。その子は、人の気持ちにとっても敏感で、優しい心を持っているのです。ぼくのちょっとした表情や態度にもすぐ気づき、

「大丈夫？」

と声をかけてくれました。

そんなある日、彼が作文の発表をしたとき、教室のうしろの方でクスクスと笑う声が聞こえました。ぼくはすぐに振り返って、

「なんで笑うの？」

と言いました。

自分が言われたあの言葉を、今度は自分が使っていたのです。笑っていた子は少し驚いた顔をして、すぐに笑うのをやめました。そのとき、ぼくは少しだけ、自分が成長できた気がしました。

それから、ぼくは「人を守る言葉」を使いたいと思うようになりました。からかうのではなく、励ます。笑うのではなく、認める。ちょっとした一言で、誰かを傷つけることもできるし、救うこともできる。言葉って、すごい力を持っているんだと感じます。

SNSでも、人を笑いものにする投稿がたくさんあります。「ネタにしてるだけ」「悪気はない」などと言う人もいます。でも、そうやって広がる見えないいじめが、どれだけ人の心を追いつめているか、もっと多くの人が気づいてほしいと思います。

ぼくもまだ完ぺきではありません。つい無意識で誰かを傷つけるようなことを言ってしまうかもしれない。でも、そのときは、ちゃんと謝りたい。そして、「人の気持ちを想像すること」を忘れないようにしたいです。

人を笑って傷つけるのは簡単です。でも、人と一緒に笑って幸せになるのは、もっと価値があることだと思います。

これから先、もっとたくさんの人と出会い、いろんな考えにふれることがあると思います。その中で、わかり合えないことがあっても、「ちがいをおもしろがる」のではなく、「ちがいを大切にする」心を持ちたいです。

そして、あのときぼくに、

「なんで笑うの？」

と言ってくれた友だちに、心からありがとうと伝えたいです。あの一言が、ぼくの心に人権という大切な光を灯してくれたからです。

これからもその光を消さずに、ぼく自身が、誰かの心をあたためられる存在になれるように、成長していきたいです。人の痛みに気づける優しさ、立ち止まって考えられる強さ、そして間違いを認められる素直さを持ち続けたいと思います。

もし、目の前で誰かが傷つけられているのを見たとき、ぼくは勇気を出して、

「それはちがう」

と言える人でありたいです。ただ見て見ぬふりをするのではなく、小さくても声を上げること。その一歩が、世界を少しずつ変えていくのだと信じています。

ぼくにできることはまだ小さいかもしれませんが、でも、誰かを笑う代わりに、誰かを守る選択をする。そんな自分でありたい。人権は、特別な人だけのものではなく、すべての人が、大切にされるべきものだからです。